

# 水のながれ

永井荷風

青空文庫



戦争後、市川の町はずれに卜居ほくきよしたことから、以前麻布あさぶに住んでいた頃よりも東京へ出るたびたび隅田川すみだがわの流れを越して浅草の町々を行過る折が多くなったので、おのずと忘れられたその時々のお出を繰返して見る日もまた少くないようになった。

隅田川兩岸の眺めがむかしとは全然変ってしまったのは、大正十二年九月震災の火で東京の市街が焼払われてから後の事のちで、それまでは向嶋むこうじまにも土手があつて、どうにか昔の絵に見るような景色を見せていた。三囲みつめぐり稲荷いなりの鳥居が遠くからも望まれる土手の上から斜に水際に下ると竹屋たけやの渡しと呼ばれた渡場わたしばの栈橋さんばしが浮いていて、浅草の方へ行く人を今戸いまどの河岸かわぎしへ渡していた。渡場はここばかりでなく、枕橋まくらばしの二ツ並んでいるあたりからも、花川戸はなかわどの岸へ渡る船があつたが、震災後河岸通かしどおりの人家が一带に取払われて今見るような公園になつてから言問橋ことといはしが架かけられて、これは今戸へ通う渡しと共に廃止された。上流の小松島から橋場はしばへわたる渡船も大正の初めには早く白鬚橋しらひげばしがかけられて乗る人がなくなつたので、現在では隅田川に浮ぶ渡船はどこを眺めても見られなくなつた。

わたくしはこれらの渡船の中で今戸の渡しを他処たしよのものより最も興味深く思返さねばな

らない。何故かという、この渡場は今戸橋の下を流れる山谷堀の川口に近く、岸に上るとすぐ目の前に待乳山の堂宇と樹木が聳えていた故である。しかしこの堂宇は改築されて今では風致に乏しいものとなり、崖の周囲に茂っていた老樹もなくなり、岡の上に立っていた戸田茂睡の古碑も震災に碎かれたまま取除けられてしまったので、今日では今戸橋からこの岡を仰いで、「切風の夕越え行くや待乳山」の句を思出しても、むかし味つたようなこの辺の町の幽雅な趣を思返すことは出来ない。むかし待乳山の岡の下には一条の細い町が、この辺の町の幽雅な趣を思返すことは出来ない。むかし待乳山の岡の下には、今戸焼の陶器や川魚の佃煮を売る店があつて、この辺一帯の町を如何にも名所らしく思わせていたが、今はセメントで固めた広い道路となつてトラックが砂煙を立てて走っている。また今戸橋の向岸には慶養寺という古寺があつてここにも樹木が生茂っていたが、今はもう見られないので、震災前のむかしを知らない人たちには何の趣もない場末の道路としか見られないようになつたのも尤である。平坦な道路は山谷堀の流に沿うて吉原の土手をも同じような道路にしたのみならずその辺に残っていた寺々をも大抵残るものなく取払つてしまつた。むかしからの伝説は全く消滅して残る処は一ツもない。

今戸橋をわたると広い道路は二筋に分れ、一ツは吉野橋をわたつて南千住に通じ、

一ツは白鬚橋の袂たもとに通じているが、ここに瓦斯ガスタンクが立っていて散歩の興味はますます  
 なくなるが、むかしは神明神社の境内けいだいで梅林もあり、水際には古雅な形の石燈籠いしとうろうが立  
 つていたが、今は石炭を積んだ荷船にぶねが幾艘いくそうとなく繋つながれてるばかり、橋はしむこう向にある昔  
 ながらの白鬚神社や水神すいじんの祠ほこらの眺望までを何やら興味の無いものにしてるのも無理は  
 ない。向嶋の堤防はこの辺までも平に地ならしされて、同じように自働車やトラックの疾  
 走する処ところにしている。百花園ひゃっかえんは白鬚神社の背後にあるが、貧し気な裏町の小道を辿ちようめつて、  
 わざわざ見に行くにも及ばぬであろう。むかし土手の下にささやかな門をひかえた長命ちようめ  
 寺いじの堂宇も今はセメント造つくりの小家こいえとなり、境内の石碑は一ツ残らず取除かれてしまい、  
 牛うしの御前ごぜんの社殿は言問橋ことといばしの袂に移されて人の目にはつかない。かくの如く向嶋の土手と  
 その下にあつた建物や人家が取払われて、その跡が現在見るような、向嶋公園と呼ばれる  
 平坦な空地になつたのだ。これは荒川の河流が放水路の開通と共に、如何に險悪な天候に  
 も決して汎濫はんらんする恐れがなくなつたためかとも思われる。吉原の遊廓外くるわそとにあつた日  
 本堤づつみの取崩されて平かな道路になつたのも同じ理由からであろう。实例としては明治四  
 十三年八月に起つた水害の後、東京の市民は幾十年を過ぎた今日こんにちに至るまで、一度も隅  
 田川の水が上野下谷したやの町々まで汎濫して来たような異変を知らない。その代り河水はいつ

も濁つて澄むことなく、時には臭気を放つことさえあるようになったのも、事に一利あれば一害ありで施すべき道がないものと見える。浅草の観音菩薩かんのんぼさつは河水の臭気をいとわぬ参詣者さんけいしゃにのみ御利益ごりやくを与えるのかも知れない。わたくしは言問橋いんもんばしや吾妻橋あづまばしを渡るたびたび眉ひそを顰め鼻おほを掩いながらも、むかしの追想を喜ぶあまり欄干らんかんに身を倚せて濁つた水の流を眺めなければならぬ。水の流ほど見ているものに言い知れぬ空想の喜びを与えるものはない。薄く曇つた風のない秋の日の夕暮近くは、ここのみならず何処いずこの河、いずこの流れも見るには最もよき時であろう。江戸時代からの俗謡にも「夕暮に眺め見渡す隅田川……。」というのがあつたではないか。

# 青空文庫情報

底本：「荷風隨筆集（上）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年9月16日第1刷発行

2006（平成18）年11月6日第27刷発行

底本の親本：「荷風隨筆 五」岩波書店

1982（昭和57）年3月17日第1刷発行

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年3月8日作成

2019年12月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 水のながれ

永井荷風

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>